

君羅久則名誉教授，杉村泰教名誉教授及び 高井收名誉教授記念号の刊行によせて

小樽商科大学長 山 本 眞樹夫

本研究紀要『人文研究』君羅久則名誉教授，杉村泰教名誉教授及び高井收名誉教授記念号の刊行にあたりご挨拶を申し上げます。

お気づきのことと思いますが、『人文研究』が1つの輯で3名の本学名誉教授記念号を刊行するのは異例のことです。次輯では2名の名誉教授記念号の刊行が予定されています。団塊の世代に属する教授が一斉に本学を退任するという異例の事態に対応せざるを得なかった結果ですが、まず、3名の名誉教授への非礼をお詫び申し上げなければなりません。

君羅名誉教授，杉村名誉教授及び高井名誉教授は御三人共，「実学，語学及び品格」の育成をモットーとする本学において，長年にわたり英語教育の中心としてご活躍頂いた方々であり，一挙に重鎮が去られることは本学にとって大きな痛手です。

君羅久則名誉教授は1972年，東北大学大学院修了後，4月本学専任講師として着任されました。1978年助教授，1992年教授に昇任され，2012年からの特任教授の期間を含め実に42年間，本学に奉職されました。本学百余年の歴史の半分近くを直接担って頂いたことになります。その間，2000年10月から2007年9月までの7年間，言語センター長の重責を担って頂きました。これも異例の長さといえます。

君羅先生のご専門はシェークスピア研究を中心とする英文学です。1990年3月から1年半，文部省在外研究員として英バーミンガム大学シェークスピア研究所で研鑽を積まれております。一方で本学の英語教育の改革に熱心に取り組み，視聴覚機器を駆使した英語教育，コンピュータによるCALL

(Computer Assisted Language Laboratory) の整備等に熱心に取り組んで頂きました。これらは、いわば頭ではなく体で覚える英語、ビジネスで使える英語という、小樽商科大学での英語教育とは何かを強く意識された取り組みといえます。本学の英語教育の基本的在り方を確立し、そのための環境整備は、君羅先生のおかげといえるでしょう。

杉村泰教名誉教授は東北大学をご卒業後、国立秋田工業高等専門学校助教等を経て、1989年助教授として本学に赴任されました。本学赴任前にはカリフォルニア州立大学ドミンガス・ヒルズ校に留学され修士号を、また本学赴任後、2008年には東北大学より博士(文学)の学位を授与されています。

杉村先生のご専門は英国小説と批評理論に関するものであり、2007年3月より1年間、英ケンブリッジ大学 Darwin College で客員研究員として研鑽を積まれております。それらの成果は数多くのご著書、論文の結実されております。本学では英語の他に英文学を担当され、本学英語教育の発展に大きなご貢献を頂きました。

高井收名誉教授は、アラスカ・メソディスト大学、オレゴン大学をご卒業後、1982年本学助手として在職され、その後南カリフォルニア大学大学院で学ばれ MSTSL の学位を授与され、1987年専任講師として改めて本学に赴任されました。1989年助教授、1996年教授にご昇任されております。ご経歴からも分かる通り、ネイティブに近い英語力を持ち、英語教授法をご専門とする、英語教員として極めて貴重な存在でした。

学部では、英語の他に英語科教育法、比較文化等をご担当され、温厚なお人柄と、ユーモア溢れる語り口で人気教授でした。また、大学運営においても先生の的確なご指摘、ご判断は、教職員の信望を大いに集めるものでした。

高井先生は、日本民謡で最も難しいといわれる「江差追分」をこよなく愛し、師匠に師事し、あの難しい節回しをわがものにしてあります。本学のイベントでも何度か先生の美声を聞かせて頂きました。

改めて、本学英語教育の中心におられた3名の名誉教授が、一挙に去られることに大きな喪失感を感じざるをえません。今後とも名誉教授として、本

君羅久則名誉教授，杉村泰教名誉教授及び高井收名誉教授記念号の刊行によせて 3

学の英語教育の一層の発展にご支援を賜るよう，この場を借りて，お願い申し上げます。